

---

# **不幸だった私の転生物語**

くーねる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸だった私の転生物語

### 【Zコード】

Z9719P

### 【作者名】

くーねる

### 【あらすじ】

もともと運が悪かった私は、ある日とうとう死んでしまった。その原因はなんと神様のミス！ 責任はあちらにあるので、チートな能力を付けてもらい違う世界へ転生しする事になった。転生する先は……『ネギま！』の世界だつた……！

私の第二の人生が今、幕を開ける。

## 第1話 プロローグ（前書き）

初めまして、くーねるです。

処女作ですので決して上手くはありませんが頑張りました。  
不自然な点があつたら指摘していただければ幸いです。

それでは始めます。

## 第1話 プロローグ

私は運が悪い。

街を歩けば必ずと言つてこいほどヤクザに絡まれるし、

車にひかれた回数は11歳の頃に三桁を更新した。

最近はさらに悪化してきて、空から鉄骨が降つてくることが3日で一回はある。

そろそろ死ぬんじゃないかなー、とか思つていたら - - -

- - キキイイイイイイイイツ！ - ! -

ツガツシャアアン！ -

なんと学校の帰り道、ダンプが横滑りしながらいさぎに来たのである。

……いや、さすがにコレはないでしょ？

だって学校に続く坂道ですよ？

しかもダンプも一台ずつ微妙に違つ軌道で襲いかかってきたし……。

数々の不運を乗り越えてきた私でも、さすがにコレを避けることはできず、

「これなんて無理ゲー？」

私が思わず呟いた言葉が辞世の句となつた。

……私を呼んでくれるよいつな声が聞こえる。

「……………」

「……………ひー……………ぐだきこつ…」

……ひるねこ。

私は声の聞こえる方をまだしつかり覚醒していない頭で割り出し、そちらへ手を伸ばした。

「…………あー…………やつと起きて…………くれ…………？」

そんな声をよそに私は手につかんだそれを握ってつきつ抱きしめる。

「ふふ…………？」

状況が理解できず聞抜けな声をだす声の主。

「ふ」  
「

『気の抜けた声を出しながらとてもやわらかいそれ……抱き枕を揉んで感触を確かめる。』

「ひゃっ！ 何するさ……つぶああ！？ ふやっ、んう……！」

『むう、やわらかい……。』

『しばらく揉んでこると、

やわらかかった抱き枕の一部が硬くなつたので、つまみほぐしてみた。』

「ひにやあっ！… ちよっ！ や、やめっ！ ふわあア、それ以上はあっ！… んつ、あ、あアアアアアあアアア！…！」

『そんな甲高い鳴き声と共に抱き枕は身体を小刻みに震わせて動かなくなつてしまつた。』

『抱き枕が動かなくなつたことに満足して私は意識を手放すのだった。』

.....

.....

.....

：

「本当にすこまかごでした……」

あの後起きたら、抱き枕もとこの幼女に丸一冊くらい説教された。

話を聞いてみると、ビックリの幼女は神様らしい。

簡単には信じられない話だが、宙に浮いていたので嘘でもないだろ  
う。

それよりも此方はずっと正座しつぱなしなのだ。

おかげで足が全く動かない。

つてか大丈夫かな？ なんか足真っ黒なんだけど……。

目の前の幼女に目を向ける。

それにしても……

「先ほども言つたよ、貴方は」こちらのミスで死んでしまいました」

私が死んだのそっちのミスですか。 どんだけ運悪いんだ私。

「それでですね、このままでは此方のメンツが立たないので別の世界で人生を謳歌していただきたいんです」

しかもミスをもみ消すためにこいつらの「機嫌とりですか。

色々言いたいことがあるが、取りあえず

「異世界、ですか？」

一番疑問に思ったことを質問する。

「そうですね。貴方がもともといた世界以外に行つてもいいんだとい  
します」

「具体的には？」

「『ネギまー』の世界です」

あの世界か……。

「転生するにあたつて、いくつか特典が追加されます」

まあ、生身だと死ぬだらうしね……。

「先ず、不老不死ですね。エヴァを助けたいですし」

コレだけは譲れない。原作を知っているので、できれば吸血鬼にな  
らずに幸せな人生を送つて欲しい。

「ふふつ、そうですか。後は何が欲しいですか？」

「あと……は、そうですね……。TYPE-MOONのFat eに出てくる宝具と能力、月姫のアルクエイドの空想具現化、あるいは智を呼ぶの才能が欲しいですね。それと「ミコト黒い竜と優しい王国」のアバターの使役、高い解析能力が欲しいです」

コレだけあれば十分すぎるくらいだ。

「わかりました。あとついでに高い魔力と気、それらを使いこなす才能も追加しておきますね」

それはさすがにチート過ぎると思つたけど、貰える物は貰つておこう。

「最後に転生する時期ですが、原作開始700年前でいいですか？」

「そうですね。能力も試してみたいですし」

力加減がわからなくて原作キャラを殺すとかは勘弁したい。

「それから、あちらに行つてからやつていただきたいことがあります。

世界樹を保護すること。創造主の死亡の確認。それから世界の滅亡といった危機を防ぐことです」

「世界樹の保護と創造主の死亡は、3つの世界の滅亡」を阻止するためですか?」「

幼女神様の言葉に自分の考えを返す。

「さすがですね。創造主はもちろん、世界樹を利用すれば世界征服できるかもしませんから」

「わかりました」

「あと世界樹とバスを繋いでおきます。これで世界樹と会話ができます」

「ありがとうございます」

「最後になりますが貴方は私の加護により運がいくらか良くなつて

ます。ですから - - -

今度こそ幸せになつてください。

そんな妙に愛情のこもつた言葉を最後に私は『ネギまー』の世界に  
転生した。

## 第2話 人物紹介（前書き）

るい智の呪いのリスクが低すぎるという意見があつたので、変えさせていただきました。

これから設定が代わり次第、ここに追加していくたいと思います。

## 第2話 人物紹介

名前：アルトリア・ペンドラゴン

身長：154cm

体重：42kg

性別：男性

容姿はFateのセイバーと全く同じ。身長はもちろん、体重まで  
が同じ。

これが神様に変えられたものではなく天然だから始末に負えない。  
実は自分の容姿を結構気にしている。本人曰く、出来ればもっと男

らしく筋肉もりもりに成りたかった。

男なのにこの愛くるしい姿は、多くの男たちを魅了したらしい。

そのため襲われた経験は三桁を越えるが、すべて返り討ちにしたとか。

彼の一人称が「私」なのは、セイバーの口調を真似て以来それが身についてしまったためである。

重度のヲタク。

## Fate風パラメーター

筋力：B（E）

耐久：A（D）

敏捷：EX（A+）

魔力：EX（- -）

幸運：C（E）

宝具：EX（- -）

( ) 内は生前のもの

技能<sup>スキル</sup>

直感 : EX (A +)

もともと生前に持っていた第六感がさらに発達したもの。

これさえあればテストの選択問題なんて答えを見ているよ'うに解ける。数学なども計算式をすつ飛ばして勘で書いたものが正解になる。戦闘面においても抜群の有用性を發揮する。

観察眼(真) : EX (B)

神様から貰った技能の一つ。生前よりもランクが上がった。物事の本質を見極めることができる。以前は仕事で交渉<sup>じこう</sup>をする時に無意識のうちに使っていた。

神性：A (- -)

神様の加護の力により、高い神性を得た。

カリスマ：A + (A)

生前からその誰もが見惚れるような容姿をしていた。そのため、一度見たら呪いのように引きつけられてしまう。  
神様のおかげで神々しさに磨きが掛かってしまった。

不老不死

神様によって不老不死となつた。

アルトリアと仮契約、本契約することによって同様に不老不死になることが後に判明。

天才

あつとあらゆる分野において非常に高い能力を発揮できる。

### 空想具現化

自分が思い描いたことをそのまま現実に作用させる力。  
チート過ぎる能力。

### 直死の魔眼

転生した際に発現した能力。  
もともと才能があつたうえに、死を体験したので使えるようになつたらしい。

脳が破裂しても再生するので、視ようと思えばどんなものの線や点も視れるらしい。

さらに魔眼を最大限に使いこなす身体能力もあるから手に負えない。

### 才能

『るいは智を呼ぶ』という暁worksの作品に出てくる能力。  
出てきた才能は八つで、それは呪いと表裏一体の物となっている。  
原作では呪いは常に発動していたが、この作品では使用した才能

の種類と時間に応じて各呪いの発動時間が決まる。

- ・才能

『望みの未来を紡ぐ力』　『望みの未来を引き寄せる』

未来を予知するだけでなく、望む未来への道筋を見いだすことができる。

- ・呪い

『本当の性別を知られてはならない』

この才能は望んだ結果に応じて呪いの時間が決まる。

例えば明日偶然交通事故で死ぬはずだった人を、助ける程度だと1月位呪いの枷が現れる。

- ・才能

『思考の加速』　『思考加速』

時間の感覚を延長できる。加速できるのは思考のみで、肉体は通常のまま。反動で眠気が引き起こされる。

- ・呪い

『他者に助けを求めてはならない』

IJの才能は時間によって呪い発動の長さが決まる。

- ・才能

『身体能力の一時的な強化』　『身体能力の強化』

能力は速く走つたりすごい力を出したりできる。反動で凄い空腹になる。

- ・呪い

『人と約束を結んではならない』

IJの才能は身体の強化具合と時間によって呪い発動の長さが決まる。

魔法世界に行つたときのネギ（闇の魔法の術式兵装の疾風迅雷時）位だと1時間使うと1週間くらい呪いが現れる。

あまり使い勝手がよくないので滅多に使用しない。（魔力や気を使わないでの閑知されたくないときなどに使用する）

- ・才能

『運動の再現』　『運動の再現能力』

他者の運動を寸分違わず正確に、自分の身体へコピーして再現する。どんな動きでも見たら、録画再生のようにぴったり再生できる。

- ・呪い

『通つた事のない扉を開いてはいけない』

レベルの高い動きになる程、呪い発動の時間が長くなる。

神鳴流奥義・斬魔剣式ノ太刀を完璧に真似ると半月、呪いが現れる。

- ・才能

『道具を使いこなす力』

あらゆる道具の使い方を直感する。

パソコンみたいな用途の広い道具だと、かなりなんでもできる。はじめて銃を手にしても使うことはできるが、当てるのには技量や力も必要。

- ・呪い

『固有の名を呼んではならない』

使用した時間で呪い発動の長さが決まる。

10秒で10日くらい。結構使い勝手が悪い。呪文も唱えられないし。（無詠唱なら可）

- ・才能

『人の心を読む』　『心を読む』

実はそんなに細かく心を読むことはできない。嘘か本当か、どんな感情を抱いてるかぐらいしかわからない。

慣れた相手、付き合いが深くなれば、色々とわかるようになってくれる。

- ・呪い

『人に直接触れてはならない』

心を読む深さによって呪いの長さが変わる。  
嘘か本当かを判別するくらいだと5日程度。

- ・才能

『感情の増幅』

目を合わせた相手のその時の感情を増幅する力。

- ・呪い

『光を浴びてはならない』

太陽の光を直接肌に当ててはならない。蛍光灯などの光は大丈夫

増幅させる大きさによって呪いの長さが変わる。

恐怖でなにも考えられなくなる位のレベルだと約1ヶ月位。

・才能

『命の上乗せ』

人の命を奪つて自らの『命』を延ばす力。

・呪い

『自分に関する本当のこと話をしてはならない』

上乗せした命の分だけ呪いが発動する。

しかし、もともと不老不死なので何かの理由で傷ができない時（魔力や気が使えないなど）以外使うことはない。

アバター

「ミコト 黒い竜と優しい王国」で接続者たちが使役するもの。通常は5人1組だがこの作品では彼一人で操縦可能。ちなみに原作ではアバターが壊れると接続者も死ぬが、これはアバターに割いていた脳の部分がアバターの破壊により破裂することが原因であるためこの主人公には関係がない。

### 第3話 修行です（前書き）

今回はエヴァに会つまでの繋ぎみたいなものです。

主人公の能力の詳細が出てきます。

### 第3話 修行です

「 うーが……」

『ネギヨー』の世界に着いたみたいだ。

早速能力を試してみたかったのだが、周りの風景がおかしいことに気づく。

木や葉にはもちろん空気まで線や点が見える。

本能的にこの線と点を理解する。

コレは TYPE-MOON の作品で出でて来る 遠野 志貴 と  
両儀 式のもつている

直死の魔眼 である。

⋮  
⋮

⋮

『落ち着きましたか?』

取りあえず人に会わないように森へ移動したら、神様から連絡があった。

目を閉じてもまわりに死が見えるので結構精神的にきつい。

『取りあえず魔眼殺しの眼鏡を渡しておきます』

そう神様が言うと田の前に眼鏡が現れる。

「『この OZ-OFF の切り替えも練習しなきゃね……』

『やつですね。この森に結界を張つておいたので此処でしつかり練習してください』

神様の気遣いに感謝し、私は早速修行をした。

- - - 修行1日目 - - -

まずは、能力の把握から始めよつと頑がつ。

身体能力だが、コレは前世と変わらないよつだ。

腕も全く筋肉がついていない。

このままでは満足にフライパンも振ることができないので、取りあえず魔力での強化を試してみる。

私はもともと魔力を持つていなかつたのでコレの流れを感じるのは簡単だ。

体内の違和感を感じ取り、それを右手に集める。

「やつた!!」

喜びのあまりガツツポーズをしてしまう私。

しかしそれがマズかつた。

溜めていた魔力を握りつぶしてしまったため爆発。

結果私の右腕は跡形もなく吹っ飛び、周囲に甚大な被害をもたらした。

結局丸一日腕の再生に使つてしまつたので、今日はあまり進歩しなかつた。

おはよーひーじがいます。先程重要なことに気づいてしまった私は。

- - - 修行2日目 - - -

⋮

⋮

⋮

それは - - - 名前です。

前の世界で使っていたのもあるけど、この際だから新しい名前が欲しい。

何かいい案がないかと考えているとふと、生前知り合いから言われた言葉を思い出して湖に移動して自分の顔を確認する。

……よし、変わらない。

水面には肩まで位の金色の髪を持った緑色の瞳の眼鏡美少女が映っていた。……自分で言つて悲しくなるけどコレは私です。

……あ、今初めて言つけど私は男ですよ。

昔から他の男の子より高く、さらに筋肉が全く付いていない身体はどう見ても女の子にしか見えず、初見で男の子と見破られるることはなかった。

ちなみに小さい頃は『僕』だったが、知り合いに勧められた『Fantasy night』というゲームのヒロインの一人のセイバーが『私』と使っていたのでそれを真似ていたら何時の間にかそれが定着してしまった。……そのせいで、さらに女の子扱いされたけど。

知り合いがこのゲームを勧めた理由は、私の容姿がセイバーと瓜二

つだったからださうだ。

せつかくだから、このキャラの名前を使ひはじめてみたと申つ。

『神様あ～。いつかの世界での名前決めましたよ。アルトリア・ペンドラゴンドラン』

昨日教えてもらひた通信を使い、名前を報告する。

『あ、…… Fateですか？』

『す、じいですねー。神様何でも知つてますね』

『何でもは知らないですよ。知つてることだけ、つて何言わせてん  
ですか……』

本当に何でも知つてそ�だ……。

『まあ、いいんだつたら設定しておきますよ』

『ん、お願ひします

その後少し話して神様との通信をOFFにした。

わあ、やじますかーー！

.....

.....

.....

そうやって毎日のように特訓していくと、あいつが聞こえて年月が過ぎていった。

さて、今までの成果をまとめてみよう。

先ず魔力と気を以前のように暴発させないで制御することができた。  
今なら無意識のレベルで魔力や気を使って身体能力を上げることができる。

魔法については…………つん、残念としかいいようがない。

魔力も気も充分すぎるほどにある上に世界の魔力を行使できるように神様にバスを繋げてもらっているのだ。

問題はそつー——精霊である。

今の私は事実上神様の遣いである。

人間はもちろん精霊達よりも立場的に上なので彼らは私を怖がっているのだ。

嫌われているわけではないと思うのだが、魔法を使うために精霊を使役しようとする緊張でガチガチに固まってしまうらしい。

気分的にはアレ……教育委員会や校長に自分の授業を見られてる教師的な？

とにかく魔法の使用は私に懐いてくれる精霊を探すしかない。

精霊のバックアップなしでも使えることには使えるが時間がかかること、魔力の無駄な消費、さらには制御の難しさ等を考えると宝具を使った方が余程効率がいい。

なので今私に許されている魔法は、身体能力強化、瞬動や虚空瞬動などの縮地類、純粹に物（木の棒や剣）に魔力や氣を込めての強化くらいである。

次に宝具や魔術（Fateの世界の）だが、これらは使用する際にこちらの魔力で代用することができることがわかった。

精霊などを使う必要がないのではじまうはこひらを主流に使つていこうと思つ。

アーチャーや衛宮士郎の投影魔術も使つことができる。

しかも彼らとは違い、剣以外も簡単に投影する事ができた。

ランクが1つ下がるのは変わらないが、アーチャーがやっていたみたいに強化の魔術で性能を上げればいいので問題ない。

後原作で遠坂 凜が土郎にぶつ放していたガンドは、私の場合數十年に渡って鍛えられたので原作以上のフィンのガトリングを打ち出せるようになつた。

王の財宝ゲート・オブ・バビロンについてはただ魔力を消費させればいいだけなので、特に問題はなかつた。

そんな感じで宝具については特に大きな問題もなかつた。

問題は空想具現化である。

この能力、思ったことがそのまま現実に作用する技などがコレが意外と難しい。

訓練中にゲームのこと考えてたら目の前にPCとソフトがあつたと

きには、マジビツた。どれくらいビツたかっていうと、1週間完徹でゲームしてしまったくらい。……べ、別にただゲームやりたかった訳じゃないんだからねっ！！　ただそのままにしておくのが勿体無かつただけなんだから…！

……ちなみにエネルギーは電気ではなく魔力という謎仕様だった。

ゲームをクリアした後にどうするか考えたが、Fateの世界の魔術回路の起動時のようにON OFFのスイッチを頭の中を作ることで問題をクリアした。

同時にこの方法が、直死の魔眼の制御にも有効だったのはうれしい誤算だった。

魔眼の制御ができるので眼鏡もはずすことができた。

取りあえず直死の魔眼は線や点を正確になぞつたり突いたりするための技術が必要だったので、必死になつて修得した。

ナイフだけだと心許ないので、投影魔術や 王の財宝による武器による点への射出、魔力で編まれた糸による線の切断などの練習もした。

魔力の糸を編んだときに思いついたのがセイバーがつけていた鎧である。

何年もの月日をかけて瞬時に展開できるように開発した。

この鎧だけで並みの中級魔法程度じゃ傷すらつかなくなつたと思つ。この智の才能については思つたよりも使い勝手が悪いのであまり多用しないようにしようと思つ。

最後はアバターだが―――正直コレはヤバかった。

アバターを召喚するときは、こちらの魔力でいいらしい。

どうやら最初に必要な魔力を私から吸収して、物理干渉力を持つた実体が現れるっぽい。

並のアバターだと大したことはない。強かつたとしてもラカン式強さ表風にいえば6500くらいだらうか。

問題は原作で人類最大こと比奈織 カゴメのアバター、ステイニングだ。

一度アレを使って操作をミスって自分に突っ込ませたことがあった。

そのときは私が展開できる限りの最高の魔法障壁及び物理障壁と気での全開氣合い防御、魔力で編んだセイバーの鎧、投影魔術で投影した 燐天覆う七つの円環まで使ったのに全部紙のように切り裂いた。

なんとか体を捻らせて避けたが衝撃波によって身体が上下に分裂。

普通なら即死級の怪我だが不老不死なので死ぬことはない。……といつても下半身が消し飛んだので簡単には再生できないが。

回復魔法も使えないでの何かないかと考えてたらセイバーの剣の鞘があることを思い出す。

痛みで呻きながら私は全て 遠き理想郷アヴァロンを展開して事なきことを得た。

その後何度もステイニングを出したが、細かい操作は無理だった。

下手に軌道を変えようとするとまたあの悲劇が繰り返される」とは明白だ。

よつぽどの事がないとき以外は使わないよつこしよつ。

『エヴァンジェリンが吸血鬼化してから十数年経ちました』

「ぶふう――――!」

神様からの突然の報告に紅茶を飲みながら「数十年の成果を確認していた私は、それを吹き出してしまった。

『? どうしたんですか? 突然吹き出して』

『突然吹き出したのは貴女のせいですよ!―― つてそういうじゃないくて!』

イスから立ち上がり出かける準備をしながら神様に聞く。イスから立ち上がり出かける準備をしながら神様に聞く。イスか

『今エヴァが何処にいるかわかりますか?』

過ぎたものは仕方がない。神様を責めようにも時期を聞かなかつた自分も責任はある。

『そうですね。今貴方がいる森の入り口付近にいます』

その言葉を聞いて私は家を飛び出した。その言葉を聞いて私は家を飛び出した。

## 第4話 吸血鬼の真祖（前書き）

やつとHヴァアを登場させることができました。

心なしかHヴァアがキャラ崩壊してる感が否めない……。

## 第4話 吸血鬼の真祖

Side エヴァ

私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、吸血鬼の真祖だ。

好きでこんな身体になつたわけではない。

10歳の誕生日に起きたときはもうこの身体だつたんだ。

私は私をこんな身体にした奴を殺し、各地を転々と放浪していた。

何時までも一ヶ所に留まつていると魔女の疑いをかけられてしまつからな。

私は住んでいた城から出たことがなく、最初の数年こそ勝手が分からなかつたが今では一通りのサバイバル技術を身につけている。

それにここ数年は一度も追われておらず、そろそろ襲撃されなくなってきたかと思っていたのだが、甘かった。

朝、宿で寝ているときに突然襲撃があつたのだ。

私はどうさに展開した障壁で難を逃れたが、私以外の人は流れ弾に当たつて死んでしまった。

「失礼する。ワタシは、立派な魔法使い『マギスティル・マギ』だ。  
貴様を魔女として捕らえにきた」

ちつ……面倒なのがきたな。

心中で悪態を吐きながら一般人を巻き込まないよう森へ移動する。

……それが罠だとも知らずに。

Side Out

Side 立派な魔法使い（笑）

異端の魔女を森に追いやることに成功。

『そつちに行つたぞ』

仲間に念話で連絡をし、ワタシも森へ向かう。

「フフツ、楽しみだ……」

Side Out

Side アルトリア

こんにちは、アルトリアです。

神様からの報告を受けて、森の入り口付近に来てみると何やら騒がしいです。

念のため魔力や気を遮断する結界を作り、そこで様子を見る。

数人のローブを被った魔法使いっぽい人がいる。

あ、なんか足下に金髪の幼女がいる。

……あれ、エヴァじゃね？。

よく見てみるとその幼女は私が探していたエヴァンジエリンだったのです。

取りあえず介入の準備をしようと思つ。

顔を見せたくないでの服装はセイバー・オルタにしようと思つ。

今まで着ていた服にかわって赤い血管のような模様がはいった黒い鎧を開く。

ちなみに私はそれ、その服装に様々な能力を付加させている。

オルタの鎧は通常よりも遙かに筋力と耐久が上がる代わりにスピードが落ちる、といった感じに。

闇の魔法の鎧バージョンみたいな感じだ。

顔にオプションでつく仮面っぽいのは、私のアレンジで最高峰の認識阻害が掛かっている。

右手に 約束された勝利の剣を出現させる。

通常の 約束された勝利の剣とは違つ赤と黒で構成された聖剣が出  
てきた。

コレで準備は完了。

- - - -さて、

「行こうか」

私は思考を切り替え、相手を殺すことに専念する。

S i d e O u t

S i d e エヴァ

しへじつた。

今思えば町であんなに派手な攻撃をしたのに、その後あまり追撃がないのも妙だつた。

森に誘われていると気づいたが時すでに遅く、不意をつかれて捕縛結界に捕まつた上に不死殺しの武器で傷をつけられた。

完璧に平和ボケだ。

「フフッ……最初の攻撃を完璧に凌いだのでどんな高位の化け物かと思つていれば……まだこんな子供だとは……」

「ぐ……」

嘲笑うよひなその声に答えることもできない。

髪をつかんで持ち上げられ、

「貴様のような異端を生かしておくわけにはいかない。……死ね！」

その言葉とともに魔法が放たれる。

（あ……死んだ…）

避けることができない攻撃、私は死を覚悟したが

「約束された - - - 勝利の剣《エクス - - - カリバー》！  
！！！」

その声と共に感じた莫大な魔力に目を見開く。

目の前を漆黒の極光が通り抜ける。

辺りにはなぎ倒された木々やもはや原形をとどめていない魔法使い

達が転がっていた。

助かつたのは私に語りかけてきた魔法使いくらいだろうな。……まあ、助かつたといつても体中から血を流し、すでに満身創痍だが。

呆然としていると足音が聞こえた。

先程の攻撃の主だろう。それの方に顔を向ける。

そいつは赤い血管のような模様がはいった黒い鎧を身につけている。顔につけている田を覆う仮面のようなものは、強度の認識阻害でも掛かっているようだな。正直私ですら相対しているのに正体が分からん。

その黒い騎士は生き残った魔法使いに近づいていった。

怯えている魔法使いに剣を突きつけ

「さあ、貴様の罪を数えろ」

思っていたよりも遙かに若く、女性のよつな声でそつと囁いた。

Side Out

Side アルトリア

やつべー……あつぶねー……

エヴァが危なかつたからとはいえ、冷静に考え見ると 約束された  
勝利の剣を使うのはどうかと思った。うん。

一步間違えば全部消し飛んでたんじやないかな？

とつぞに威力弱めてよかつた……。

おつと、こんなこと考へてる場合じゃないな……。

私は生き残った魔法使いに近づき、

剣を突きつけながら、某仮面ライダーのセリフをセイバー・オルタに似合つようアレンジしたものを宣言する。

このクソムシは先ほどの一撃ですっかり怯えてしまつたらしく、何も喋らない。

さて、どうやって殺そつかな。

空想具現化使つてもいいし、アバターで捻り潰してもいいんだよね  
え……。

あ！ そういえば5年くらい前に遊び半分で作つて人に試してないやつがあつたなあ。……使ってみますか。

「アルトリア・ペンドラゴンが命じる……『死ね』」

私がそつ命令するといこの男の田の光が消え、一種の催眠状態になる。

男はロープの内側に隠していたナイフで自らの喉を裂いて死んだ。

ふふふ……コレは私が生前見ていたコードギースを参考に遊び半分で作った能力。名前はそのまま ギアスである。

先ず世界とのバスを接続して世界そのものに話しかけられるようにする。

コレにより私から発せられる言葉は「世界」からの命令と同義になる。

原作とは違い、視覚ではなく聴覚から侵入する。

それから逃れるためには完全に音を聞こえなくなる（ただし）の弱点については相手の脳に直接命令する事で克服されている。念話妨害されるとどうしようもないが）か、

強靭な精神力で耐えるしかない。

発動条件は私の本名を唱えること

ギアスを掛ける相手を私本人がしつかり認識することである（認識しないで使つてしまふと声が聞こえる範囲に効果が及んでしまつため）。

コレ、結構楽でいいね……。

今度からコレを多用しよう。

実験も終わったので取りあえずエヴァのところまで行く。

うわあ、結構酷い傷だねえ……。不死殺しの効果のお陰がぜんぜん再生してないし。

んー、取りあえず……

剣の鞘を開かせてエヴァを治療する。

「な……！」

何か驚いてるエヴァちゃん。……可憐すぎると思つ。お持ち帰りしたいです。

数十秒後、エヴァの外傷は全て元通りになつていた。

「お前……何故私を助けた？」

エヴァから問われる。

……さて、なんて答えましょかねえ？

Side エヴァ

いきなり田の前に現れたと同時に魔法使い達を瞬殺し、生き残った奴にはなんだかよくわからない事をして自殺を促す。

おまけに不死殺しつけられた傷を何か鞘っぽいもので全快させた。

本当に何者なんだ』『いつは……。

「お前……何故を助けた?」

「そのままでは埒があかないので聞いてみることにした。」

「あー、ちょっと待ってねー」

奴は軽い口調でさう言つて黒い鎧と仮面を消した。

やはりあの鎧は魔力で編まれたものだったか……。

吸血鬼である私は魔法と関わり始めてから、すでに10年以上の歳月が経っている。

それなりに才能もあつたのでそこそこ高位の魔法使いである私は、それを見抜くことができた。

取りあえず今はここのことを集中、つて・・・・・

「なつ！？」「——

思わず赤くなってしまった私は悪くない。

認識阻害を解除してそこにいたのは、絶世の美少女だつたからだ。

年齢はだいたい……14くらいだろうか。

朝日を浴びて黄金に光る肩まで伸びた髪。透き通るようなきめ細かく光を反射する真っ白い肌。どのような宝石にもない淡く深いやわらかい瞳。

全てが精巧に緻密に計算されていくようなその容貌は、人よりも寧ろ人形の近い。

その姿は男も女も精靈も悪魔も、おそらく神でさえ見惚れるだらう。  
しばらくポーッと見つめていると  
この少女に声をかけられた。

「おーい……大丈夫ですかー？」

「ひやつ！？ ひやいつ！？ だ、だだだ大丈夫でしゅう……」

/ / /

# 「カフツ」ビシャア

何故か吐血する美少女。

「お、  
おい！  
いい  
いい  
！」  
大丈夫か！？」

# 倒れた美少女を抱きしめるが

「幼女…………最k…………グフツ」

と、私に聞こえないくらいの大きさで呴いて倒れた。

結局ここに一つの事については何一つわからなかつたような気がするな  
……。

辺りを見回すとあたりに散乱している木々に抉れた大地、数人分の  
肉塊とおびただしい量の血、吐血して倒れた美少女に私。

……取りあえず木陰に移動するか。

## 第5話 ハヴァとアリア（前書き）

なんか、場面が飛びすぎというか説明が下手というか……。

アルトリアがなんか怖いです。聖杯戦争だとバーサーカーで召喚されそう……。

主人公の過去についてはいずれ書く予定です。

## 第5話 ハウアとアコア

Side アルトリア

「とにかくで、これからよろしくね」

「おい待て！ 何がとにかくだ！ 何も説明してもらっていないぞ  
……」

と、怒るハウアちゃん。

説明が面倒だったから省いてと思つたが、せはり止められた。  
ハウアちゃんって結構真面目だよね。

何故ハウアがこんなに取り乱しているかを回想してみましょ。

では……回想スタートです。

田を覚ましたときに木陰でエヴァに膝枕をしてもらっていたことを把

私がエヴァちゃんの攻撃（精神的な）によつて血の海に沈んでから  
3時間くらい経つたらしい。

#どうんていた意識が覚醒する。

⋮  
⋮  
⋮

握したらまたダメージを負いそつだつた。……エヴァ、恐ろしい娘  
！！

再び入りそうになる液体を抑えつつ、私は体を起こす。

「おい、お前大丈夫か？」

そんな時エヴァちゃんが私に話しかけてくれました！－ よく通る高いソプラノボイス。容姿に会わない尊大な口調。全てが魅力的です。……あ、やべ…。

油断していた私の口から熱きパトスの結晶が溢れ出してしまいました。…………こふっ…………

「おいイイー！－ 本当に大丈夫か！？」

大丈夫……。大丈夫だからもうちょっと離れてお願い。

「そのままじゃやつたのーの舞になるので、私は急いで意識を入れ替えて言ひ。

「取りあえず、ソーシャアレだし私の家行こつか……」

エヴァは吸血鬼の真祖で。私は先程のバトスの流出で。

何でもエヴァは、真祖ではあるがまだ吸血鬼としての弱点は残つて  
いるらしい。

光とか浴びたりニンニクを食べたりしても、完全に消滅してしまう  
ことはないがかなり肉体的には辛いんだとか。

私は言わずもがな、2度に渡る萌をエンchantさせた精神攻撃が  
原因だ。

理由は違うが2人とも今外にいることは危険だ。

「それはいいが……」

言ごよどむH・V・A。やつぱりまだ警戒されてるのかな？

……まあ、仕方ないよね。助けるためとはいって高位の魔法使い達、一瞬で片付けたし。

そう思っていたのだが……それは杞憂だったみたいだ。

「私はH・V・A・ンジH・リン・A・K・マクダウエルだ。……お前は？」

「…………ああ」

そういえば自己紹介するの忘れてたね。

律儀な言動に思わずはにかんでしまつ。

「私はアルトリア・ペンドラゴン。よろしくね、ヒガマンジヒン」

その言葉と共に、私は手を差し出した。

そして家についたところで今に至る。

流石に原作知識があることを言つわけにはいかないので、なんとか誤魔化さなければならない。

取りあえず直球勝負を持ち掛けでみたがあつさり突っ込まれた。

意外と真面目なんだよね、エヴァちゃんは……。

さて……どうしようかな。

この金髪幼女相手だと中途半端な嘘は見抜かれるだろうし、それが原因で警戒心を煽ってしまつたら元も子もない。

現状での最前手は……おそらくコレだ。

「仲間がほしかったんだ。私も不老不死だし。」

不老不死というハンデはどうしても普通の人間と生きて行くには大きすぎる障害となる。

必然的に私たちのような人外は人間と関わることをしないようになり、孤独に陥ることが多くなってしまつ。

だから不老不死であるエヴァにとつて唯一見つけた同胞だ。恐らくエヴァちゃんは喰いつくだらう。

案の定エヴァちゃんは私が不老不死であることに驚きながらも興味を持ったようで、その後少し話しあつてエヴァちゃんと一緒に住むことになりました。

取りあえず、エヴァちゃんの実力を見ておきたいなあ。

：

エヴァ（最初はエヴァンジエリンちゃんと呼んでいたがエヴァちゃんが、エヴァで良いと言つたので呼び捨てになつた。）と一緒に暮らすようになつた翌日、私は自分の家の庭の訓練場へ彼女を連れて行つた。

「こんな所で何をするんだアリア？」

と、エヴァが聞いてくる。

アリアというのは私の略称である（エヴァに愛称で呼んでもいいと言われた時に、私の方も という流れになつたのだ。最初は『アルト』リアで アルトにしようと思とも考えていたのだが、しつくりこなつたので『ア』ルト『リア』で アリアにした。アルトリアも女性名だし）。

「んー？ ああ、取りあえずエヴァの実力を見ておこうと思つてね」

エヴァの問いかに答へながら体の重心を落とす。

これから一緒に暮らしていくなら相棒の強さはある程度知つておかなければならぬ。

まだ魔法使いとして未熟であるエヴァの今後の教育方針を決める良い機会もあるし。

「なるほどな。確かに戦力の確認は必要か…………では、全力で行くぞ！」

その言葉と共に無詠唱の氷の魔法の射手を数本放つてきた。

私は右に大きく避けることでそれを回避、取りあえず様子を見ることに専念する。

流石に全力で戦うと力の差がありすぎるのに、投影魔術によると黒鍵の投影以外を使わない縛りで行こうと思つ。

さて……どこまで出来るかなエヴァ？

Side Out

Side Eva

アリアとの模擬戦が始まったがこけらの攻撃がいついつに当たらない。

十数年ほどだが魔法使いとして私はそれなりの強さを持つていて自負している。

だが目の前のこいつは私を追っていたそれなりに高位の魔法使い達を一瞬で消すことができる実力の持ち主。

普通の手段で勝てるわけがない。

しかしアリアはどうやらまだ真面目に戦う気が無いらしく、攻撃を仕掛ける様子がない。

経験、実力共にスペックでは完全に劣っていることは明白。

勝機があるとしたら、それは最初の一 手だ。

油断している時に一気に置みかけるしかない！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック  
来たれ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を こおる大  
地！」

アリアの足下を凍りつかせ、動けなくする。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！」

続いて無詠唱の魔法の射手を時間差をつけて数個ずつ放つて時間を稼ぐ。

アリアはこの攻撃を避けずにいつの間にか手に持っていた細長い剣で軌道をそらして防御した。

この程度の攻撃をそらしている事を考えると、障壁の類は展開していないだろう。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

来たれ氷精 閻の精 閻を従え吹けよ常夜の氷雪 閻の吹雪！！」

中級レベルの呪文だが魔法の射手よりも遙かに物理破壊力の高い魔法。

さすがに正面から喰らうのはマズいのか動こうとしていたが、私の魔法で足が凍つて動けないようだ。

アリアは動けないながらも体を捻り直撃は回避できたが、その代わり身体を守るために突き出した細長い剣と右腕がズタズタで使い物にならなくなっていた。

その姿に私は勝利を確信した。

Side Out

Side アルトリア

見くびっていた。慢心していた。油断していた。

開始直後から単調な魔法の射手の連弾。ずっとそればかりで飽きたのでそろそろ決めようと思つていたら、いきなりこおる大地

を喰らつて動けなくなつた。

そこに時間差で 魔法の射手が放たれたが、コレをとっさに投影した黒鍵でそらす。

「 - - - - 間の吹雪! - - - -」

なんとか防いだ矢先、中級呪文が私に向かつってきた。

足が固定されているため回避は不可能……一瞬でそう判断した私は、体を捻り少しでも威力を和らげるため黒鍵を突き出した。

その結果黒鍵はボロボロ、右腕に至つては関節一つ動かすことができない。

肉を裂き、骨が露出しているその腕を見て昔を思い出す。

「ふ……ふふ、はは」

赤い赤い赤い赤い紅い赤い赤い朱い朱い朱い赤いあかい赤い紅  
いアカニアカニアカニアカニアカニアカニアカニアカニア  
あかい赤いあかい赤い朱いアカニアカニアカニアカニア  
いあかい - - -

- - - 笑いながら黒鍵を構える。

「はは…は、ふふ」

- - - エヴァが異変に気がついたようだけどどうでもいい。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
イタイイタイイタイイタクテイタクテイタクテイタクテイ  
タクテイタクテイタクテイタクテイ

- - - 視界に線と点があらわれるがどうでもいい。その意味なんて  
わかりすぎるくらいに理解している。

「は、はははっ！ はは！」

イタイイタクテアカクテアカイカラ - - -

「……………」

壊れたように笑いながら黒鍵を投影して投擲、エヴァに接近する。

「ちい！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック  
来たれ氷精 閣の精 閣を従え吹けよ常夜の氷雪  
闇の吹雪！」

突然の豹変ぶりに混乱しながらも、エヴァは 魔法を放つ - - -  
- が、黒鍵を巻き込んだその魔法は、私に直撃する前に消滅する。

「なに!?

驚きを隠せないエヴァに向かってやがて数本黒鍵を投擲、エヴァの避けるルートを限界する。

「やつはー、エヴァーー！」

予測通りの場所へ逃げたエヴァに拳を放つた。

「ぐー、じふっ…」

間髪入れずにお腹を押さえてしづくまるエヴァの頭へ、流れのよつな動作で蹴りを打ち込む。

彼女は満足に受け身もとれずにゴロゴロと転がってそのまま動かなくなつた。

「あれー？ もうダメじゃなかったのーエヴァちゃん？」

呼びかけてみるが反応なし。……」いや元壁に氣絶しちゃつたな。

まあ、私も満足できだし良いかな。正直痛みと疲労で立つてのも辛いし。

戦力の確認の方は……及第点かな。

魔法使いとしてはそれなりのレベルだ。

これ以上はひとまずエヴァが原作でネギに選択させていた、前衛型か後衛型かを選択するまで決められないかな。

私はそう結論するとエヴァを担いで家へ帰った。

…………あ、腕の怪我治すの忘れてた。

## 第5話 ハヴァアとアリア（後書き）

学校が始まったのでかなりの不定期更新になりそうです。

マジだりい……。

## 第6話 すぐすべえつ、あたんこつも（前書き）

すいません遅れました。

今回はちょいエロ入つてます。』注意ください。

今思つたんだけど才能と呪いいらなくね？ まあ、なくしませんが

……

後前半と後半で主人公の口調が変わってる気がしないでもない。

## 第6話 すぐすべえつ、あたんこつ

Side アルトリア

エヴァをボコボコにしてから1週間ほど経った時のことだった。

目が覚めたときこそ怖がっていたが今では慣れたらしく、よそよそしさもなくなっていた。

「はあ？ 修行したい？」

「ああ、先日のことで自分の力不足がわかつたからな」

エヴァの答えに納得する私。確かに今のエヴァでは私が力を振るうときに邪魔になる可能性が出てくる。

だから修行するといふ案には賛成だが一つ問題があった。

「でもエヴァ……、私魔法使えないんだけど？」

八?

私が放った爆弾発言に驚いたのか、開いた口がふさがらないエヴァ。

「正確には精霊や契約が必要な魔法を使えないんだけどねー。なんとか怖がられちやつて……」

「なんだそれは……」

それはこっちが聞きたい。

無理に使つこともできるけどあまりの緊張のしすぎで精靈がうつかりミス、ためていた魔力が暴発し右肩までじつそり持つて行かれるという悲惨な結果になつた。

ちなみにエヴァは取りあえず後衛型の魔法使いを選んだ。

まあ、強くなつてくると前衛や後衛の線引きはあまり意味がないし、私たちは時間がたっぷりあるので焦らずに強くなつていけばいい。

「魔法については家の物置にかなり魔法書があつたと思ったからそれを参考にしてねー」

「ああ。礼を言つやアリア」

そつと物置へと向かうエヴァ。

それを見届けて私は庭へ出て自身の研究を始める。

「投影、開始」

イメージするのは某剣の英靈の黄金の剣。私が持っているオリジナルのエクスカリバーも出して2つを見比べる。

- - - 取りあえず及第点かな。

10割とまではいかないが8~9割の神祕を再現することができた。時間をかければ10割の再現も可能だろひ。

今後の課題はもつと息を吸いつゝに投影を完璧に成功させること。今ままでは黒鍵はともかく、[宝具を実戦で満足に使う]ことはできない。

私は投影した剣を置き、新たに 遠野志貴の使っていたナイフを投影する。

頭の中のスイッチを切り替え、直死の魔眼を発動させる。

私の視界は死にあふれ、文字通り『死海』となる。

どうやら今の私は精靈などに近いらしく、周りの自然等の風景は最初から明確な『死』を見ることができた。……まあ、元 人間なので人の死も理解することができるのだが、……。

実は私はこの眼を完全に制御する事ができないらしく、エヴァと戦つたときのようにテンションMAXになると自動で発動してしまう。

前世から少し殺人衝動が強かつた私なので、仕方がないと言えば仕方がないだろう。

何もしなくて毎日毎日殺人衝動が溜まっていくので定期的に発散させなければならない。

この間の狂化も衝動抑え込んでたからってのも原因の一つだし。

暴走してエヴァを殺すとか勘弁だなあ……。

そんなことを思いながら身体強化を使わずに周りの木々を次々と殺していく。時折ゲームで見た七夜っぽい体術を駆使したりもする。

.....

⋮  
⋮

「ふう……終わり～」

鍛錬が終わった後、周りは倒れた木々で埋め尽くされている。

それらを火葬式典を付与した黒鍵を複数投げ刺して燃やす。更にほかの所に火が移らないように障壁を開く。

緑が生い茂っていたそこは一瞬にして不毛の荒野となり果てた。

やべえ……やりすぎた。森が一部だけ禿げあがつてるよ。

まあ、百年くらいすれば元に戻るだろ？。直死も木にしか使ってないから、地面は生きてるし。

そう思つて私は家の中へ入つた。

次の日からエヴァとの修行の日々が続いた。

取りあえず内容を少しだけ説明しておこう。

- - - 回想開始 - - -

「私は魔法が使えないで、戦闘における立ち回り方を教えます。これを知るだけで何倍も戦略が立てやすくなりますからね」

「それはいいんだが……何故敬語なんだ？」更に何故メガネ？」

「それは私が形から入るタイプだからです！ 今の私はエヴァの師匠、つまり先生だからですよ！ …… それとも似合ってないかな？」

「ツー? いや! 似合ってるぞアリアー!」

「セーフー? ..... よかつたあ」

「はうう……。か、可愛すぎるわ」／＼＼

「うわっ、アリア！！　いきなり抱きつくな！！　ってグリグリするなあ————！」／＼

「アホかああああああ――――――――――――」

「あ、昨日は取り乱して『ゴメン』……」

「ああ、もう気にしないからいい…………。ところが『おおむせかい』をまともに喰らってペンペンしていたときまさすがに恐怖を感じたぞ…………」

「あー……ぶっちゃけると自分でも驚いたよ…………。それに殺人衝動を性欲に変えることができるのも驚いた…………」

「殺人衝動？」

「ん？ ああ……言つてなかつたねえ。文字通り人を殺したくなる衝

動の」と。鎌まつすがねと爆発するんだよ。」

「それってこの前の…………」

「アーッアーッアーッアーッ。まあ、最もあの時はその前に久しごとに殺して興奮したからかの余波って感じ…………ってヒガア聞いてる?」

「…………

「……ヒガア 気絶してるー? そんなにあの時のヒガア怖このか…………。

「それじゃあ、今度こそ始めるよ!」

「それはいいんだが、昨日私が何をしていたか知らないか? 全く覚えてないんだが……」

「ア、アリカラ……」

「まあ? アリカラだと?..」

「何でもないよ……。ハザア、そのままの音でいい……」

「?」

「取つあえず! 前も書いたように立ち回りを教えるよ!」

「あ、ああ……」

「助かつたぞアリア。今日はこれで終わりか?」

「よし!まあ、基本はこんなところかな。後は実際に闘つてると  
きに自分で最適化するしかないね」

⋮  
⋮  
⋮

「うん、そーだよー。明日から私と戦闘訓練かな」

「え、！？」

「あ！？ ちょっとエヴァ戻ってきてー！」 エヴァ、エヴァー——

「はっ！？ 何だ？」 何かあつたのか？」

「んーん！ 何でもないよ！ 何もないからー！」

「ル・ル・ル」

- - - 回想終了 - - -

……なんか思い返してみれば半分以上私がエヴァの所為で中止になつてゐる気がしないでもない。

あとあの時の私そんな怖かったの？ エヴァなんか思ひ出さないよ  
うに記憶を封じて留みたいだし……

話は変わることになるがエヴァは飲み込みが速く、とても優秀な生徒だったので教えてている此方も楽しかったのを覚えている。

5年程で家にあつた全ての魔法を習得し、尚且つ自分でも新しい魔法を編み出しているようだ。

私は相変わらずこの世界の魔法が使えないが、投影魔術を完璧にマスターした。手始めに『無限の剣製』アンシナリック・ブレイドワークスを使つてみたが……私の種族が精靈な為か維持にそれほど魔力を必要としない。

今までの修行からこれが私の戦闘方法だ。

対人戦……自身の肉体、投影魔術による黒鍵、ガンド等の魔術

対軍戦……宝具、アバター

対空間戦……固有結界、空想具現化

……なんだこのチート。世界と繋がっているから魔力も無限っぽいし……。

今なら創造主だって瞬殺できる気がする。もういるはずだし早めに殺しておこうかな……。

原作ブレイクを考えていると、ヒヴァアが私の寝室にやってきた。

「ア、アリア……少しいいか？」——

「ん……どうしたのエヴァ？」

彼女の顔は薄暗い部屋でもほつきりとわかるほどに真っ赤になっていた。

何となく予想がつぐがそれを言わずに微笑みながら話を聞く。

さて……どうするのかねえ彼女は……。

「ア、アリア……少しいいか？」／＼＼

私は夜、アリアの寝室へ訪れた。

理由はその……あれだ、わかるだる。というかわかれつ！ 仮契約の事だ。非常に不本意なことであるが私はこいつに惚れてしまったらしい。

だから自分の物にしたい。問題なのはこいつが女であるということなのであるが……これは聞いてみるしかないだろう。

「あのな……お前はその……ど、同性愛をどう思つへ？」

「はい……？」

キヨトンとしているアリア。

「だから同性愛をどう思つ?」

再度言い直す私。彼女は一瞬悪戯を思いついた子供のように笑つたが、変な質問をして嫌われていなか等と考えていてそれには気づかなかつた。

「んー……正直に言えば……」

「い、言えば……?」

「ない」

それを聞いた瞬間、私は何も考えられなくなる。彼女は否定どころかその言葉に嫌悪感すら出していた。私の思いが、私の感情がたつたの2文字で否定された気がして、

「いや、別に同性愛を否定する訳じゃないよ。ただ私にウザつたい

感情向けてこなればだけね。ふふ、ねえエヴァもそう思わな  
い……？」

「ひつ、……ぐすつ……ひう」

気がついたら泣いていた。

「はつ！？ ちょ…エヴァ！？」

数十年生きている私なのだ。思えば後にも先にも私を本気で泣かした  
奴はコイツだけだったかもしれん。

必死で「機嫌をとろう」とアリアが何かかにかと言つてくるが、最後  
の抵抗とばかりに顔を俯かせて逃げる。

「あー……もう…エヴァ聞いて…！」

アリアが私の腕を掴みながら“それ”を言った。

「私は……実は男なんだけどっ！」

「やあっ！……って、え？」

彼女の口からあり得ない言葉が出てきてフリーズする私。

……え？ 男？

S i d e   O u t

沈黙。痛いほどの沈黙が辺りを包む。今夜は風がかなり吹き付けていたはずだが空気を読んだのか窓がぴくりとも揺れない。何だテメー風だけに空氣読みましたってか？ おもしろくねーよ出直してこい。

あーあーあー、何か口調が崩れてる気がしないでもない。セイバーの口調真似るよう努力したけど結局一人称しか身につかなかつた件について。

「え？ 本当に、お、男なのか？」

「ホントホント。私男。立派なナーモツついてる」

「いきなり下ネタをかますな！！……後口調変わつてないか？」

「はい、変わつてます。でもこいつが素だからね？ 頑張つて納得して。」

やつらのヒトエヴァは頭を抱えながら泣きうなづいた。

「それで……何で最初に男だと言わなかつたんだ？」

彼女はぐつたりとしながらも聞いてきた。むう、やっぱり律儀な娘だよねエヴァちゃんは。

「えーと……そっちの方が面白そうだと思つ……」

そういった刹那、私でも知覚できないスピードで何かが私の横の空間を切り裂きながら通過していった。

ちよ、ナニあれ？ 私が直感で避けてなかつたら死んでたよ？ ベッドが粉々なんだけど……。つーか見えないつてどんだけー。

即死級の攻撃を躊躇いなく実行したエヴァをたしなめようとしたさくらを向くと

そ  
こ  
に  
は  
鬼  
が  
い  
ま  
た  
。

し

「ひツ！！」

悲鳴も上げながらも理性を保っている私は結構すごいこと思つ。

目の色が反転し、体には圧倒的な霸氣を纏い、隙あらば此方を亡き者にしようとしている。不老不死になつてから初めて死を覚悟した。死なないけども。

「おもしろい、そう、だつた、から、だと？」

「エヴァ 落ち着いて。私達は話し合えるはずだよ。後での話し方怖い

必死に説得に掛かるも、

「そうか、では…… O H A N A S I シ よう カア？」

「シぬガイい！！」

これが人生で初めて恥も外聞もなく上げた悲鳴でした。

「十五歳、十五歳、十五歳、十五歳」

手を膝に当てて息を整える。なんだあの入外、闇の魔法とかチートすぎる。

『闇の吹雪』取り込んだら打撃に氷属性がついて尚且つ当たった瞬間魔力を吸収するオマケ付き。

『こおるせかい』は取り込んで空気中の水分、ひいては私の体内の水分まで凍すし。

闇系の超広範囲殲滅呪文を取り込んだときなんか、夜だし影といつ影からエヴァが転移してきて手に負えなかつた。

殺す氣でやれば何とでもなるが流石にそれはイヤだ。取りあえず一瞬の隙をついて田くらましを使い逃亡、影分身を使って何十にも分かれる物量作戦を実行。

まあ、気休め程度の物だが考えをまとめ時間くらいはあるだろ？

解決策は正直思い浮かばない。が、そもそも言つてられない。長くても朝日が昇り明るくなるまでには何とかしないとこれほど派手にやつているのだ、誰かが気づいてしまってもおかしくはない。

さて……どうし？  
——  
「うわっ！ 気づかれた！！」

ついか最早人語を話していないんだけど……。大丈夫なのかあれ？  
闇の魔法の副作用とかじやないの？

まあ、もつそろ終わらせますかね……。

私は黒鍵を左右の指の間全部に作り出し、それを投擲する。鉄甲作用で投げている + 障壁貫通付<sup>トク</sup>をしているので、エヴァは黒鍵を避けるしかない。

生じた隙は一瞬だ。しかし、達人同士の戦闘で1秒でも止まることは死を意味する。

私は瞬動で彼女の頭上に移動、上から地面へ叩きつけた。

そのまま彼女のところに落ちる。

「エヴァ」

彼女に跨りながら名前を呼り、その声に反応するよつに目を開いた。完全に出はないにしる、彼女が冷静になつたので幾分か狂氣が収まつたようだ。

「アリア……お前、は……」

何とか一件落着とか思つてるとエヴァの悲しみのこもつた声が聞こえた。

「なあ、お前は私のことが嫌いか？」

そういえばそうだった。全然全く解決などしていい。寧ろここからが本番である。ここでミスつてしまえば全てがパーだ。……元々私の所為だけだ。

「ん、私も答えて欲しいんだけど……えーと……エヴァは私のことが

好きってことで良いんだよね？」／＼

流石に自分からこういう事を言つのは恥ずかしいが今日は全面的に  
私が悪いので仕方がない。

「あ、ああ。だから最初にあんなことを聞いたんだが……／＼…  
…その顔を見るにトラウマだつたようだな……」

「肯定だ。男にもてるなどなんの意味があるのか？　吐き気がするわ、  
おえっ。

「エヴァのことは嫌いじゃないよ。寧ろ愛しています。エヴァたん萌  
え」

「ほ、本当か！？　な、なり……ば、パク、仮契約してください…  
…」／＼

「ふつ……！」はにかみながら頬を染める顔を見て、久しぶりに感  
じた謎の波動の所為で吐血しそうになるが、下にエヴァがいるの  
で気合いで押さえ込む。

エヴァが仮契約の魔法陣を描き終わり準備も終了。ちょこんと座つて真つ赤になりながらも唇を少し上に突き出す仕草がたまらなく可愛い。これがいれば私は「エヴァのことは嫌いじゃないよ。寧ろ愛しています。エヴァたん萌え」

「ほ、本当か！？ な、なり……ぱ、パク、仮契約してください…」  
「／／／

「ふつ……！」はにかみながら頬を染める顔を見て、久しぶりに感じた謎の波動の所為で吐血しそうになるが、下にエヴァがいるので氣合いで押さえ込む。

エヴァが仮契約の魔法陣を描き終わり準備も終了。

ちょこんと座つて真つ赤になりながらも唇を少し上に突き出す仕草がたまらなく可愛い。これがいれば私は神様だつて殺してみせる！ やらないけど。

「それじゃあ、いくよ」／／／

「ああ」／／／

徐々に互いに近づいていきついにそれが重なった。

- - - 假契約 - - -

「ん……ふはつ……お、カードが出てきたな、つて……んむうつー?」

「ふふ……。はむ……んちゅふ、んう……ちゅぱ……んん、う」

はははー やつとおあずけしていったことが堂々とできるのにはこの程度で終わるわけがないだろう。

一旦離したエヴァの唇に強引に口のそれを重ね、舌を相手の口内に入り込ませる。

「ん、ん、——！  
ふあ…………んぐう…………わわふ…………ん…………んぬ、う！」

「んん… りゅうぽー… えふあ、 のんふえ…」 // /

エヴァが私から口を離そうとしているが無駄無駄無駄ア！！ 今私は己が出せる魔力と気の全力をエヴァを抱きしめることに使用している。絶対に抜け出せないだろう。

下だけでは足りず更に自分の唾液を無理矢理相手へ送る。

エヴァも頑張つて抵抗しているが……私の前世で無駄に鍛えられた性技を舐めるなどいいたい。しばらくすると、こくつ……こくつ……と喉を鳴らしていた。

濡れてぼーっとなっている双眸や口から溢れた唾液はさらりと私を暴走させるには十分なもので、事実私は止まらなかつた（最後までは行かなかつたが）。

今日の教訓：エヴァぱねえ

第6話 すくすく えつ、あたなこつも（後書き）

エヴァ かわいいよエヴァ。

彼女のためなら世界だって滅ぼしてやる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9719p/>

不幸だった私の転生物語

2011年1月24日08時05分発行